

---

# 月の水

山内 詠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月の水

### 【Zマーク】

N9150C

### 【作者名】

山内 詠

### 【あらすじ】

全てを失つて身を堕とした小国姫。静かに生きていた彼女を探しだしたのは、全てを手に入れた大国の反逆者だった。作者の好きな設定を盛り込みまくった習作です。中編の予定。一部ブログでも公開しております。

## 再会（前書き）

直接的な性描写はありませんが、連想させるものがあります。『』注意ください。

## 再会

茫然とする私を他所に、男は部屋に入るなり当たり前のよう言ひ放つた。

迎えに来た、と。

突然何を言うのか。

一瞬どうにもならない怒りが私の心を春の嵐のように乱したけれど、ひとつ大きく息を吐くことで、私は激情と折り合ひをつける術を既に身につけてしまっている。

どうにもならない」とは、どうにもならない。

それにして男は「」をどうだと思つてゐるのだろう。

獣脂でできた独特の匂いを放つ蠅燭が照らす室内は、お世辞にも綺麗とはいえない。一応片付いてはいるけれど、みすぼらしくどこもかしこもが痛み、壊れ、擦り切れていて、薄暗さでそれを誤魔化している、そんな部屋だ。

大して広くもない部屋のほとんどを占領するのはベッドでこれも触ただけで軋むような代物。それ以外にあるのはベッドの脇に申し訳程度にあるテーブル。その上にはこれまでビビの入った水差しとコップ、安物の葡萄酒が申し訳程度に入った瓶、それだけ。何もないといつてもいい部屋だらう。何しろ必要が無いから。

「連れ出しをお望みなら私ではなくて女将に言つていただけますか

わざと男に背を向けて、そっけなく言つた。

部屋まで来たのなら、既に金は払つてあるはず。

つまり男はここはどこで私がどうこう立場にいるか最初から知っているのだ。私は連れ出しの密は断つているので、男には別の女があてがわれるはず。

しかし男は呆れたように鼻を鳴らした。

「お前は相変わらず阿呆だな」

その言葉で他人の空似というほんのわずかな可能性すら消えた。男はいつも私のことを馬鹿にしていた。軽蔑していた。古いベッドが容易く軋むように、私の心はあつとこつとに昔のように引き絞られる。

男の眼差しが怖くて、言葉が痛くて。だけど近くにいたかった、その姿から目を離せなかつた、あの頃のよう。

私はこの場所を、今の立場を捨てられない。色々な過ちや問題が私を縛り付けているから。手に職も持たず、平凡な容姿の女盛りをとうに過ぎた私に出来る仕事は限られているから。

「……お客様は人違いをなさつてこようですわ

これ以上男と一緒にいるのはまずい。  
でも部屋から出たくても入口はひとつ、しかも男の背後にある。  
私は覚悟を決めて振り返つた。

「では女将に伝えてまいります。少々お待ち下さいませ」

にっこりとほほ笑んだつもりだけじ、上手くできていたらうか。成り行きまかせでなりざるを得なかつたこの仕事で習得した数少ない技術の一つだったのだけれど。

男の顔はまだ軽蔑の色を浮かべていて、だから私は、男の瞳だけは見ることができなかつた。

それが間違いだつたのかもしれない。

横をすり抜けようとしたその時、がつちりと手首を掴まれた。

「……お前は、本当に阿呆だ」

そんなことは男に言われなくてもわかつてゐる。愚図で、馬鹿で、呆れるくらい何もできない女。それが私。  
だから売春宿じるなほしょで娼婦じよふをしているのだ。他に出来ることがあまりに  
も、無さ過ぎて。

生まれも育ちも全く関係ない、ただ女といつだけでなれる職業。

ねえ、足首がはつきりと見えるくらい短いスカートと下ろした髪  
でわかるでしょ？

濃い化粧とむせそうになる香水でわかつてしまふでしょ？

私がどうこう女になってしまったか。

男は私を軽蔑していた。

ただいつもいつも、馬鹿にしたよひ、嘲笑うだけで、何一つ優  
しい言葉はくれなかつた。

だから私も言わない。男が私にそうしたよひ。

あなたは私のしらないひと。私はあなたのしらないひと。それで  
いいじゃない。

「手を離して頂けませんか」

掴まれた手首が、痛い。何も力の限り握らなくても、男の力に女  
が敵うはずないのに。

「探した」

ため息を吐くように、男は言った。

「探して、探して……こんな所に居やがつた」

そのまま引きずり戻るように、部屋から連れ出されやうにな。

「冗談じゃない。」

仕方が無かつたとはいえ、私は、私の意思でここにいるんだ。今更、本当に今更、何をしようとしているの。

「離してください」

「断る」

「離してー。」

振りほどこうとしてもがつしりと掴んだ手はびくともしない。男はまた鼻を鳴らした。

「誰が、離すか。俺がどれほど探したと思つてこる？」

そんなんのは男の都合だ。私には関係ない。

「だから人違いですってー。」

「俺がお前を見間違えるものかー。」

その言葉を聞いたのが、今でよかつた。

あの時だったら、何も失う前の、私だったら。  
一体どうしてしまつただろう。

考えるまでもない。何もかもを捨てて、男に縋りついただろう。  
故郷も、そこに暮らす民も、両親も、何もかも。  
それほどまでに、昔の私は恋焦がれていた。  
今、目の前にいる男に。

## 理由

私と男の間に何かあつたかと言われば、無かつたとしか言えない。

故郷は国というよりも少し大きい都市と呼ぶ方がしつくらぐる、小さな小さな国だった。

大国の傘の下で、辛うじて自治が認められているようなそんなちっぽけな、国。

その国の王の3番目の子供として生まれた、それが私。

10歳の時に大国の首都へと留学することになった。

それは生まれる前から決まっていたことで、もちろん留学などばかり。

女として生まれた時から、かかるべき年齢になつた時大国の王へ嫁ぐことも決まっていた。これももちろん正妃などではなく、妾として。

体裁を取り繕うためだけに通わされた貴族や王族の子弟が通う学校で、男に出会つた。

男は大国の王弟の子だった。

だから最初、私は男個人ではなく、遠くない未来に仕えることになるであろう王の影を追つていたように思う。甥と伯父なら似通う部分もあるだろうと思つて。

大国の王族は皆黒い髪と黒い瞳をもつていて、男も例外じゃなかつたから。

ただの興味が、いつしか恋になつたのがいつだつたかはもつわからぬ。

知らないうちに私は男を好きになつていた。まるで正体不明の熱病

にやられてしまったようにな。

姿を見ることができれば嬉しくて、すれ違つことができたなら胸が張り裂けそうになつて。

あんまり見つめていたからだろう。

男とよく目が合つようになつた頃から、男は私を軽んじ嘲り始めた。

男とその周辺の者たちは私を虫けら扱いした。大国に寄生する小国の虫だと。

確かに私の故郷はみつともないのだろう。ちっぽけな国を守るために大国に媚びへつらつっていた。

……圧倒的な国力の差に、武力以外で身を守る術は最も屈辱的な方法しかなかつたのだから仕方が無い。

だけどそれを口にすることは、許されない。

どんなに罵られても酷い扱いを受けても、耐えなくてはならなかつた。

人質とはそういうものだ。

そしてどうしたものか私の気持ちは男から離れなかつた。

心だけは自由。

ただそれだけを、ずっとずっと支えにしていた。

心の中でだけ、男は私に優しく愛を囁いて、大切してくれ。私の望みは心の中では叶えられた。それだけでよかつた。

私にとって現実は自分の意思とは無関係に展開していくものだつたから。

近い未来、私は男を見ることすら許されなくなる。

だから、限られた期間の中だけでも、近くにいたかった。馬鹿だと自分でもわかつていた。

15歳になつた時、後宮へと上がるようになつた。花嫁衣装も神への誓いも何も無く、ただ住む場所を王宮の外れから後宮の一室へと変えただけ。

夫となつた大国の王は父親と変わらない年齢の神経質そうな白髪混じりの線の細い人だつた。

義理で一度身体を合わせただけで、見向きもされなくなつた。人質としてやつてきた小国の王女には似合いの扱い。

王が死ぬまで後宮で暮らし、その後はどこかの修道院に入るんだろうとずつと思つていた。

生まれた時からずつと決められた道を、私はひとりで歩いていた。しかし未来は誰にもわからないということを、私に教えたのは他の誰でもない。

どうしようもないほどに恋焦がれた男、だつた。

私が後宮に上がりつて10年が過ぎた頃、反乱が起きたのである。血と剣によつて国王が廃され、王弟が玉座に着いた。その先導をしたのは、王弟の子である男。

力によつて支配してきた者は、より力のある者に支配されるのは自然の道理。しかしその後とんでもない混乱が待つていたことまで、男は知つていたのだろうか。

反乱は王宮の中だけにとどまらず、今まで傘下で大人しくしていた国々にまで瞬く間に広がつていつたのだ。

結果王宮どころか国すべてが戦場となり、巻き込まれた私の故郷は灰になつた。

帰るべき故郷を失い、王の支配という名の庇護も失つた私のようなただの妾は途方に暮れるしかなかつた。

その後売春宿に辿りつくまでの道のりは、まあよくある話なんだろ

う。

色んな人に騙され、奪われ、傷つけられたりしながら、結局、同じような立場の女が『ころ』『ころ』いる場所に落ち着いたってわけだ。

本当ならば夫ただひとりだけに見せる女の全てを色んな男に切り売りすることについて、自分でも不思議なくらい抵抗が無かつた。それしか売るものがなかつた、それだけじゃない。私にとつて男というのは恋焦がれたただ一人であつて、それ以外はどうでもよかつたんだと思う。

馬鹿で愚かで呆れるくらいにありふれた私の身の上話。

信仰心なんてとうの昔に無くなつてしまつてはいたけれど、五体満足で一応病氣も無いといつことだけは、神に感謝しなくてはならぬいだろ？

これまたありふれた話で、身体を壊して死んでいく女たちは本当にたくさんいたから。

首都へと向かう街道沿いの宿には、色んな旅人が客としてやつてきた。

そこでは男の話を、漏れ聞くことができた。

王の息子として、今最も玉座に近い場所にいるといつ。

内外の戦で疲弊しきつていたが、まだ国が大国と呼ばれる姿を保つていられるのは、王の息子の手腕によるところが大きいと。

男はいつかこの大国の王になる。

全く有利得ないただの妄想だつたけれど、その妄想が私の心の糧だつた。

もしも、もしも私を娶にするばずの王が、男だつたら。

私の身体を好き放題にするのが客ではなくて、男だつたら。

暗闇に囚われた私を救う唯一の光。

だけど、現実に男が目の前に現れて、さらに私を探していたという。

どうして？

なんで？

よりもよつて、なぜ、今なの？

「ついして一人きつで会つたのは、もう一〇年以上も昔。

それだつて、会つといつよりは遭遇した、といつのが正しいくらい。言葉さえ交わさなかつた。ただ一瞬視線が絡んだ、それだけだつた。

そんな最後の時は、まだ互いに一〇代の子供だつた。

私の知らない間、男は年月を正しく糧として充実した日々を過いだのだろう。

青ざがそざ落とされた身体と顔に表れているのはこなれた男性の色氣と冷酷さであり、支配する立場の者だけがもつ静かな傲慢を漂わせていた。

対する私はどうだ。

頭の先からつま先までびつぱつと後ろ暗い世界に漫かつているとはつきりわかる容貌は擦り切れた服と同じように荒み男にふさわしい淑女からは遠く離れている。

だから私は驚愕してもいた。

男は見間違えるはずが無いと言つたけれど、今の私に昔の面影などかけらもないのだ。

「行くぞ。こんなところ長留したくない」

ぐい、と男に腕をひかれたけれど、ぐつと踏ん張つてそれに抵抗する。

私の態度が気に食わないのか、男は舌打ちした。

そう、ここはこんなところ。真っ当な女は決して近づかない場所。

玉座に一番近いとまで言われる人物が、似合つ場所では、ない。

「離してください」

自分でも驚くぐらい冷たい声が出た。

「お客様が探ししている者はもうこの世にはいません」

間違つていらない。あのちっぽけな国の虫けら王女はもう、この世界のどこにもいない。

ここにいるのは年増の娼婦ただひとり。

「

ずっとずっと昔に失った名前で呼ばれても、もう、いないのだから心など動かない。

私はそんな名前ではない、と返すと、男の腕から力が抜けた。

「お前は俺を、忘れたのか」

忘れるはずがない。忘れようがない。

たつたひとり、男だけが私の特別だった。

心の中で、夢の中で、男は私に愛していると囁く。抱きしめて、頬を撫でて、微笑んでくれる。

だけど、それは幸福な想像の産物。ただの妄想。

心の中でだけは男は切なくなるくらい優しい。もちろん私だって王女という身分のまま、互いに慈しみ、愛し合っている。

過酷で非道な現実が妄想を私だけに価値がある宝石に磨きあげた。

だから、拒む。

男は私の特別だから。

男が穢れた虫けらの女を受け入れることなど、考えられないから。男が求めるのは、失う前の、汚れてごみ屑みたいになる前の、私のはずだから。

私はもう狂っているのかもしない。

現実と虚構の境目がわからなくなっているのかもしない。  
だって、男が私を迎えて来るはずなんて無いのだもの。

よつやく腕が解放されたから、私は男の脇をすり抜けるようにして扉に手をかけた。

そのまま部屋の外へ出てしまえばいい。だけど、私は躊躇つてしまつた。

だって、掴まれていた腕はまだ痛い。ならば、これは、現実なのかもしけないと思ってしまった。

「……替わりの女を、呼んで参ります」

本当にこれが最後のつもりで、振り向かないまま男に声をかけた。  
だけども返ってきたのは、了承の言葉ではなく、激情のままに発せられた叫びだった。

「お前の替わりなど、いるものか！」

背中も、腕も、身体」と全部包まれるように抱きしめられる。苦しい程の、力で。

耳元に男の吐息を感じて、私は目を閉じる。

心の中では、何回、何百回と繰り返された男の抱擁。

これは現実？ 私は、夢を見ているのでは、ないの？

「俺は、子供過ぎた」

男は自分のことなのに、汚いものを吐き捨てるように言い放った。始まりは思いだせないと男は言つ。何時からか、どうしてかわからなこと。

ただ属国から人質としてやつてきた王女の視線を感じるたびに、心が高揚するということを知つた。

いつの間にか自分も同じように王女を見つめとなつた。

「それが恋だと気付いたのは王女が伯父である王の妻になると知つた時だつたよ」

好きになつてはいけない、立場が違つ。わかっていた。最初はそう、思つていた。

好きになるはずが無い、属国の王女など、王の妻など。自覚した時、愛しい気持ちは憎しみと軽蔑に変つた。手に入らないならば、意味などない。他人のものになつてしまふなら、もうどうでもいい。

行動が間違いだと気付いたのは王女が王の妻になるために自分の前から姿を消してからだ。

欲しいものがどこにあって、誰のものかはつきりとわかるのに、どうやっても手に入らない。触ることなんてできない、田にてすることすら許されない。やがて愚かで幼く残酷な過去の自分の行いが改めて自分を苦しめるよつこなつた。

だから

だから奪つことにした。

替わりなど、どこにもいない。あれは唯一無二で、自分のもの。王の冠など、地位などいらない。

欲しいものは、後宮の片隅にひつそりと生きる一人の妾だけ。そのために王弟であった父親を唆し、反逆者の旗印に仕立て上げた。

「……嘘」

男の言葉が本当ならば、男は、私を得るために血の繋がった伯父を殺したことになる。

そしてこの大国に滅亡の恐怖を感じさせたことになる。今も燃ぶる戦の火を熾したことになる。

吟遊詩人も裸足で逃げ出してしまつよつな、夢物語。

「嘘ならどんなによかつただろうな」

男は自虐を含ませながら喉の奥で嘲笑つた。

## 愚か

男はそれこそ血眼になつて私を捜し回つたといつ。

私の名田上の夫であつた王が死んだ後、國中に広がる混乱はもぢりん後宮もめちゃくちゃにした。

元々後宮からは王が退位しない限り出ることは許されない。王の後宮は私のような人質の妾ばかりが集められていたから、多くの妾姫たちはこれ幸いと自國へ逃げかえろうとした。

しかし長い間世間から隔離されていた籠の鳥が行動を起こそうとする頃には、まともに身動きが取れる状況ではなくなつっていたのだ。ある者は自害し、ある者は殺され、ある者は戦火に焼かれた。運が味方した者だけが生まれ故郷の國へと帰ることができたといつ。しかしようやく帰つた故郷が滅んでしまつた者も多くいた。

誰もが右も左も善も惡もわからない争いの最中、私は混乱に乗じて罪を犯す者に絡みとられ、命以外の全てを失つた。そのせいでの足取りは後宮を出たところからぱつたりと途切れてしまつたのだろう。

この売春宿に辿りつくまでいくつもの宿を転々としたせいもあるのかもしれない。

「……探した。ずっと探していた」

私を抱きしめる力は緩むどころか一層強くなつた。

「やつと、見つけた」

吐息が耳に、うなじに、男の熱を伝える。

「もう離すものか」

この感情が偽りであつたなら、簡単に忘れることができるものであつたなら、一体どんな未来が待つていただろう。

少なくとも多くの国が戦を回避することができたであらうし、私は後宮の片隅で王の死を待ち、男は王の甥として、いくつたり前の生活を送つていたはずだ。

ただ、あの時。

最後に会つたあの時に秘めていた素直な気持ちを口に出来ていれば、誰も何も巻き込むことなく私たちはこのどうしようもない恋を諦められたかもしない。

それともあの時にお互い何もかもを捨て去れば、もしかしたら、結ばれていたかもしない。

だけどそれは所詮後になつてからならいいへりでも考えることのできる仮定の話でしかなかつた。

思いが通じあう未来を、私たちはあの時望んでいなかつたのだから。

私と男がしたことは、不治の病をただの風邪だと放置し結果、國中に蔓延させたのと同じだ。

なんという、愚挙。  
なんという、醜悪。

男の腕にこめられた力は、慰めの妄想でもなく幻でもなく、身動きを許さぬほどの強さで私を捕えて離さない。

でも私はこの腕を、振り払わなくてはならない。  
何もかもを巻き込み傷つける権利など、資格など、私には無いのだから。

「……お放し下さい。私などに触れては穢れます」

もう数なんて覚えていないくらいに娼婦としての客の相手をしてきた。  
男に似合つのは、私のような存在ではない。  
もつ、こんな虫けらのことなど、忘れて。

「お前は、本当に阿呆だな」

男は呆れたようにため息を吐いた。  
お前がどんな者でも、どんな姿でも。

「俺はこの魂が尽きぬ限り、お前を探して、求め続ける」

ぐい、と顎を掴まれ、男と目が合つた。  
ああ、この瞳。これだけは、変わらない。  
恋焦がれた、あの時の、まま。

「諦める。お前の全ては、もう俺のものだ」

支配者の微笑みをのせた男の唇は、当たり前のように震える私の唇  
を塞いだ。

ああ、本当に私は呆れるくらい愚かで、馬鹿で、どうしようもない。  
そして男も、愚かで、馬鹿で、どうしようもない。  
何もかもを手に入れたはずなのに、何ももつていらない私なんかを欲  
しがる。

ならば愚かな者同士、私と男は似合いなのかもしれない。  
お互いか、見えていないし、求めていないのだから。

## 愚か（後書き）

作者の好みでんじ盛りの翻訳作でした。  
ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9150u/>

---

月の水

2011年7月25日03時09分発行